

朝読書による授業の集中力アップで、学力向上を目指そう

石川県立小松商業高等学校

1 事例の概要

本校は、「一人ひとりの生徒の個性・能力を十分に伸ばす教育」を目指し、すべての生徒に基礎・基本をしっかりと身につけさせ、学力向上を図り、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力を育成することに努めている。平成15年度からは、三年間の文部科学省「学力向上フロンティアハイスクール」事業の中で、教育環境をより落ち着きあるものにするによって学習への集中力を一層向上させることに取り組んできた。この取組の一つが朝読書である。読書は今や学習領域に入ったと捉え、学力向上の視点から読書の意義を再認識し、多様な娯楽に囲まれながら、資格取得や学習、部活動に追われて多忙な毎日を送る本校生徒に、平成16年度より読書の習慣を定着させることを第一目標として取り組んだ。

2 実践内容

(1) 実践の目標

- ① 十分間の静寂の中で、心を落ち着かせ、集中力をつけさせる。
- ② 生徒達に、本を手にする機会を提供し、読書のおもしろさを発見させる。
- ③ 読書習慣を身につけさせることによって、自ら学ぶ力を育成する。
- ④ 読書を通じて、コミュニケーション能力の基礎ともいべき想像力を育成する。
- ⑤ 自分の知らない世界への視野を広める。

(2) 指導上の工夫点

- ① 静かな十分間
生徒と教師の共通理解により、遅刻者や私語による妨害がなく、S Tの時間と混同されない読書活動のための完全な時間を実現する。
- ② 読書指導の強化
全校生徒が月一冊以上の本を読むことを目標に、学校全体で読書指導の強化を図る。

3 指導の実際

(1) 実施方法

- ① 時間帯 8:35～8:45 ※正規の時間として日課表に組み込む。
- ② 期間 新学期の2週目～年度末日 ※定期考査、行事に関わる日は除く。
- ③ 担当 ホーム担任

(2) 「朝ドク」をサポートする取組

- ① 「読書ノート」の記載
全校生徒に、本校オリジナルの「読書ノート」を持たせて負担にならない程度の読書記録（題名、著者名、読書期間、感想、本文の写し等）を書かせる。
継続して記録することが目的なので、感想を強要せず、本の一節を写すだけでもよい。



② 図書案内の充実

- ア 朝読書コーナーの設置
- イ 推薦図書案内、購入図書案内の発行
- ウ 「図書だより」による最新書籍情報や図書館利用状況のお知らせ
- エ 「朝ドクヒットチャート」(人気書籍ベストテン、近隣書店版と本校版)の掲示
- オ 「私の思い出の一冊」先生版の作成と掲示

③ 読書感想文の全校実施

④ 生徒指導課を中心とした遅刻指導の徹底

⑤ 評価による取組の検証

前期・後期の2回の学校評価によって、成果と問題点を確認する。

C-1 朝読書コーナー

C-2 読書ノート

4 成果と課題

(1) 静かな十分間

平成16年度より生徒の本の貸出数は7倍、利用者数は10倍にも増加した。平成17年度の前期学校評価において

	15年度	16年度	17年度	
も、ほぼ静かな環境で概	総貸出数延べ数(冊)	786	5,665	4,057
ね積極的に取り組んでい	総入館者数延べ数(人)	2,104	20,702	13,002
ると答えた生徒が8割以	開館日数(日)	204	190	130
上である。(※17年度は、	一日平均貸出数(冊)	3.8	30	31
12月22日時点の集計)	一日平均入館者数(人)	10	109	100

(2) 読書習慣の定着と集中力のアップ

生徒の6割近くの252人が読書の楽しさを知った、5割の242人が進んで読書をするようになった、集中力がついたと調査に答えている。生徒全体に、学校生活での落ち着きが見られるようになり、学習環境の一層の充実が見られる。

(3) 図書館のカウンセリング的機能

「自分とは違う感じ方や考え方に触れてためになった」、「人の気持ちを進んで理解するようになった」等と読書活動を通じた視野の広がりや、活字に対する抵抗感の減少、本を媒介とした友人・家族とのコミュニケーションの広がりが見られる。

また、孤立しがちな生徒が、本を話題として司書や図書館に集う生徒達と交流の輪を広げたり、図書館を他の生徒の目を気にすることなく居られる一時避難場所としたりする等、図書館のカウンセリング的機能が見られるようになった。

(4) 調べ学習の発展としての「ふるさと小松検定」

平成17年度に取り組んだ「ふるさと小松検定」では、生徒が小松地域について調べ、学習用テキストを作成し、地域の人々をも対象とした検定試験を実施した。生徒自ら課題を見つけ、資料を読み、現地調査をし、まとめるという確かな学力が、生徒に定着した結果と考える。

(5) 読書活動の質の充実

取組の2年目に入り、読書習慣が生徒に定着する一方、定着していない者も目立つようになった。図書館を利用したことがない生徒や本を借りたことがないという生徒もまだ3割近くいる。また、「読書ノート」を活用している生徒が1年目に比べて減少し、今年度試行した「朗読」をプラスに評価する生徒が3割未満であった。どちらもの試みも、継続の方向で考えており、改善を要すると考えている。また、次の段階として、良書に触れさせることを課題と考えている。

D-1 図書館利用状況

D-2 平成17年度前期学校評価(朝読書)